

## 〔考察〕

肥満児の家族構成や家族に太っている人がいる割合は、既報告とほぼ一致した。肥満児の YG テストでの性格検討では、高度肥満群に E 型が多い結果となり、反社会性、神経質、否定的自己像がうかがえた。肥満度を上昇させた日常生活上の諸因子が性格形成に大きな影響を与えたと考えられる。肥満児は素直な子どもが多いが、肥満度の上昇とともに防衛的傾向が見られ、次第に家族関係にも影響を及ぼしていることがわかった。

## 〔結論〕

小児肥満の改善、予防、治療には身体的ケアのみならず、家族単位での心理的ケアが必要であると思われた。

## 論文審査の要旨

小児の肥満は養育段階で家庭環境に影響されることが多く、児の抱える心理的問題も少なくない。本研究では小児肥満に関する因子を肥満児と対照群の家庭環境調査、性格検査を行い検討した。家庭環境では、複合家族、母子家庭が多く、YG テストでの性格検討では、D 型が少なく、高度肥満群に E 型が多い結果となり、反社会性、神経質、否定的自己像がうかがえた。文章完成テストでは、肥満群に肯定的表現が少なく、特に父親への態度で拒否的、防衛的表現を多く認めた。Family relationships inventory の結果からは両親ともよく子を受容していたが、高度肥満群で子を甘やかす自由に行っている傾向がうかがえた。肥満度を上昇させた日常生活上の諸因子が性格形成にも影響を与えたと考えられた。肥満度の上昇とともに防衛的傾向が見られ、家族関係にも影響することが判明した。

小児肥満の改善、予防、治療には、家族単位での心理的ケアの必要性を対照群をおいて検討し明らかにした点で価値がある。

氏名(生年月日)	キムラ マサト
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第 2434 号
学位授与の日付	平成 19 年 5 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	<b>Clinical significance of area of metastasis positive lymph node occupied by cancer cells in rectal cancer</b> (直腸癌転移陽性リンパ節における癌細胞占拠比率の臨床的意義)
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌 第 77 卷 第 1 号 18-25 頁 2007 年
論文審査委員	(主査) 教授 亀岡 信悟 (副査) 教授 小林 槿雄, 吉原 俊雄

## 論文内容の要旨

## 〔目的〕

大腸癌のリンパ節転移は予後を左右する重要な因子である。近年、リンパ節内の微小転移巣が存在することが明らかになった。しかしながら、その臨床的意義については、現在まで統一的な見解は得られていない。我々は直腸癌の転移陽性リンパ節における癌細胞の占拠の形態と程度を retrospective に分析し、癌のリンパ節浸潤の程度および微小転移の臨床的意義を明らかにすることを目的として本研究を行った。

## 〔対象および方法〕

対象は、1994 年 1 月～1997 年 12 月までの 4 年間の直腸癌手術例のうち検索可能であった 119 例である。そのう

ち、リンパ節転移陽性例は69例、転移陽性リンパ節は294個であった。転移陽性リンパ節の最大断面を観察し、癌細胞の浸潤面積から、(1) grade 0: 転移陰性、(2) grade 1: 全体の1/4以下の転移、(3) grade 2: 1/4~1/2以下の転移、(4) grade 3: ①1/2~わずかに正常リンパ組織が残存、②完全に癌細胞で置き換わっている、③分類不可能に分類した。特に全体の1/4以下の転移しているリンパ節に着目し、癌浸潤面積と臨床病理学的因子との関連を検討した。

〔結果〕

1,931個のリンパ節のうち転移陰性1,637個(84.8%)に対し転移陽性は294個(15.2%)であった。原発巣の壁深達度がSS(A)以下の症例に有意に全体の1/4以下の転移が多かった( $p=0.013$ )。また、癌細胞の浸潤面積別にみると腸管傍リンパ節に全体の1/4以下の転移が多かった( $p=0.008$ )。臨床病期別に検討を加えると全体の1/4以下の転移はリンパ節転移総数が3個以下のリンパ節転移症例(stage IIIa)に多かった( $p=0.0011$ )。全体の1/4以下の転移を含みリンパ節個数の少ない症例の5年生存率は、単独転移が87.5%、転移リンパ節総数が2個までで70.0%、3個までで63.6%であった。

〔考察〕

リンパ節の1/4以下の転移は、原発巣の壁深達度がSS(A)以下の症例に多く、リンパ節転移総数が3個以下の症例(stage IIIa)に多かった。また、その局在部位は腸管傍リンパ節に多かった。リンパ節の1/4以下の転移像は、リンパ節への癌の転移、浸潤過程の初期の状態を観察していると考えられる。

我々の分類は日常臨床で得られる病理学的検索の範囲であり、簡便な分類として優れている。しかし、一方では最大断面のみでは広義の微小転移を見逃してしまう可能性があるため注意が必要である。

〔結語〕

リンパ節転移の有無は予後を左右する重要な因子であり、リンパ節転移の形態を検討しそれを明らかにすることが、微小転移の診断およびその臨床的意義の解明に寄与するものと考えられた。

## 論文審査の要旨

本論文は直腸癌のリンパ節転移における癌細胞の占拠形態と程度を病理組織学的に分析し、臨床的意義を検証した論文である。

〔対象および方法〕直腸癌手術症例119例、総検索リンパ節個数1,931個を対象とした。転移陽性リンパ節の最大断面を組織学的に観察し、癌細胞の浸潤面積から grade 0: 転移陰性、grade 1: 全体の1/4以下の癌浸潤、grade 2: 1/4~1/2の癌浸潤、grade 3: 1/2以上の癌浸潤と分類し、特に grade 1について臨床病理学的因子との関連を検討した。

〔結果〕リンパ節転移陽性例は69例(57.1%)、リンパ節転移陽性個数は294個(15.2%)であった。grade 1は原発巣の壁深達度が漿膜下浸潤SS(A)以下の症例に多く( $p=0.013$ )、腸管傍リンパ節転移( $p=0.008$ )とリンパ節転移総数が3個以下(stage IIIa)に多く認められた( $p=0.0011$ )。grade 1でリンパ節転移個数の少ない症例の5年生存率は単独転移群が87.5%、2個群では70.0%、3個群では63.6%であった。

〔考察・結語〕直腸癌リンパ節転移の分析ではリンパ節全体の1/4以下と癌浸潤の少ない群では壁深達度が浅く転移個数が少ない症例で、腫瘍近傍のリンパ節に多く見られた。直腸癌においてリンパ節転移は予後決定因子であるが、転移の有無のみではなく、転移形態や癌浸潤容量も重要な因子であることが示唆された。

以上、本論文は基礎的かつ臨床的にも価値ある論文と認める。